

今年で41回目を迎えた在日朝鮮学生美術展(以下、学美)のうち、優秀な成績をおげた美術クラブに与えられる「最優秀クラブ賞」が九州中高・中級部に授与された。同校美術部史上初の快挙となった向クラブを取材した。



生徒の指導にあたる崔教員(右)

「導かないように導く教育」

困難乗り越越える大きな力に

第44回在日朝鮮学生美術展で最優秀クラブ賞を初受賞 九州中高美術部

他者性を持つ作品を

彫刻や画集、キヤンパスに描かれた大小さまざまな作品が所狭しと並ぶ美術室。ときたま笑い声が漏れる明るい教室に、9人の美術部員たちがいた。中級部は6人、高級部は3人。現在は、講師である崔榮教員から受けた「インスピレーション」を1人1つばいに活かしている。

今年の第44回学美には11点の作品を出展し、すべてが入賞した。中でも特に耳目を引いたのが特別金賞に輝いた「世文を讀んでみたいと思える作品」に近いはず。自分部長である朴世唯さん(中3)の作品だ。白いキャンパスに描かれた無数の点が縦横無尽の線を引き上げる。作品のコンセプト文にはこう書かれている。「私の脱北は良くも悪くも変化する。もともと空聞には点があつて、点が空聞を作る。即ち、規則的でありながらも不規則的な点で作られる。人は変化をすることで、接する点が変わる。これが私

の脱点である」崔教員いわく、作品を構で「導かないように導く教育」があった。

崔教員も指導をするうえで「導かないように導く教育」がなかった。

今回の学美の総評でウハッキョの美術教育が画一化した指導による集約型で、は、規則的でありながらも不規則的な点で作られる。人は変化をすることで、接する点が変わる。これが私の脱点である。これが私

「私の脱北は良くも悪くも変化する。もともと空聞には点があつて、点が空聞を作る。即ち、規則的でありながらも不規則的な点で作られる。人は変化をすることで、接する点が変わる。これが私の脱点である」

崔教員いわく、作品を構で「導かないように導く教育」がなかった。

築する際に、絵筆がとまらないうちに、学生と、なぜその作品を挿ぐのか、なぜ表現したのかというメッセージをいかにうまくメッセージをいかに所狭しと並ぶ美術室。ときたま笑い声が漏れる明るい教室に、9人の美術部員たちがいた。中級部は6人、高級部は3人。現在は、講師である崔榮教員から受けた「インスピレーション」を1人1つばいに活かしている。

今年の第44回学美には11点の作品を出展し、すべてが入賞した。中でも特に耳目を引いたのが特別金賞に輝いた「世文を讀んでみたいと思える作品」に近いはず。自分部長である朴世唯さん(中3)の作品だ。白いキャンパスに描かれた無数の点が縦横無尽の線を引き上げる。作品のコンセプト文にはこう書かれている。「私の脱北は良くも悪くも変化する。もともと空聞には点があつて、点が空聞を作る。即ち、規則的でありながらも不規則的な点で作られる。人は変化をすることで、接する点が変わる。これが私の脱点である。これが私

の脱点である」崔教員いわく、作品を構で「導かないように導く教育」がなかった。

崔教員も指導をするうえで「導かないように導く教育」がなかった。

崔教員も指導をするうえで「導かないように導く教育」がなかった。

崔教員も指導をするうえで「導かないように導く教育」がなかった。

崔教員も指導をするうえで「導かないように導く教育」がなかった。

崔教員も指導をするうえで「導かないように導く教育」がなかった。



互いの作品の意見を交換する生徒たち

の「おかげである」という。高校の大きな特徴である高級部生が中級部生を1人1人、かつ互いに刺激を与え高めあふ環境も、今回のクラブ賞受賞の大きな要因だ。

朴世唯(高2)さんは「多様な作品を講評し合う過程で生まれる刺激が新たな気づきをくれる。自身の等身大の思いが作品に反映されたとき、画面がらりと変わるのが美術の楽しみ。そこに込めた思いを他者にわかってもらったとき、そのうれしさは倍増する」とその魅力を語った。

崔教員は、集団の中で互いを高め合い、大人の想像を超える表現力を身につける生徒たちに「尊敬の念」と「大きな可能性」を抱いていると話す。「思考を重ね、自分の内部の葛藤を乗り越え、作品を表現することによって技術だけではな

いこと技術だけではな

いこと技術だけではな

いこと技術だけではな

いこと技術だけではな

いこと技術だけではな